

【報告】特別講演会 美しい未来のために「生きる」をデザインする

開催日時：2023 年 10 月 4 日（水）13:30 ～ 15:00

会場：龍谷大学深草キャンパス顕真館（学内者限定）、YouTube Live 配信（学内外者視聴可能）

参加者人数 合計 172 名（龍谷大学深草キャンパス顕真館 81 名、YouTube Live 配信 91 名）

■登壇者：

講演者 幾田桃子氏（株式会社サヴァン CEO、デザイナー、社会活動家）

対談 入澤崇氏（龍谷大学学長）

■総合司会 水尾文子氏（龍谷大学文学部教授）

【報告のポイント】

「SDGs」という言葉がなかった 2001 年に、古着から子ども服を作るブランドをアメリカで立ち上げた幾田桃子氏は、ファッションやアートを通じて、命の大切さと性暴力をなくすための活動を展開し、「一人ひとりが大切な存在である」というメッセージを発信する。また、仏教 SDGs を推進する本学の入澤崇学長との対談を行った。会場に集った学生に対しては、大学と社会のつながりを意識し、また、大学の学びの意味を考えることを期待した。

《講演概要》

社会の不条理への疑問

幾田桃子氏は、幼少期から社会の問題について関心を抱いており、小学校の通学路の坂道を歩く間は、戦争や人種・性差別等の社会の不条理を変えていくことについて考える時間としていた。中学校でも不登校の同級生が登校しやすい環境を作ることに努め、仲間外れやいじめなどの身近な問題から「対立や派閥は必ず人を不幸にする」ことを学ぶ。また、当時放送していたテレビ CM や番組からも働き方や男女差別について疑問を抱いたと語った。高校から、アメリカ・フロリダ州に留学するが、そこで男女差別のみならず人種・LGBTQ 等の様々な差別を目の当たりにし、社会問題についての活動に参加する。

デザインの影響力と幾田氏の活動

南カリフォルニア大学に進学した氏は、国際関係学と女性学を学ぶ。在学中に社会問題をデザインの力で解決する会社を設立するも、当時は SDGs という言葉もなく、氏の会社の理念は理解されにくかったが、根気よく説明してまわったという。

氏はファッション産業が環境汚染産業の上位にあることを大学で学んだことで、ごみとして廃棄される古着を新品よりも美しいものに生まれ変わらせれば、新しいファッション産業のスタイルになると考え、古着から子ども服を作成した。その子ども服が、アメリカの百貨店 Barneys New York（以下、BNY と表記）において取扱われる好機があったが、ニューヨーク本店での商談数日前に、アメリカ同時多発テロ事件（2001 年）が発生した。本店の担当者から、情勢を考慮していまは取扱い出来ないと電話が入ったが、氏は担当者の落ち込んだ声を聴き、「（子ども服の）取扱いはいなくていいので、とにかく励ましに行きます」と返答し、ニューヨークへ向かった。氏は現地で購入した「I♥NY」とプリントされた T シャツを着て、テロ直後のマンハッタンを歩きながら道行く様々な人とハグを交わした。この体験から「ファッションは想いを可視化する素晴らしいツール」とであると実感したことを語った。翌日も同じ T シャツを着て BNY 本店へ向かったところ、担当者から「とても元気をもらった」と言われ、その場で子ども服の販売契約が成立した。

2003 年、氏は東京南青山に「セールをしない」、「在庫消化率 99%、ごみを増やさない」、「職人を守る」、「美を育む」、「知的交流の場を作る」を信条とした自社の路面店を構えた。氏の会社では売れ残った商品は次の年にデザインを改善して再販する。また、職人の地位向上、適正な報酬、高齢の職人には納期を設けない等の労働条件の改革にも取り組む。実際に、講演会当日に氏が着用していたワンピースの襟や袖にあしらわれたビーズは、そうした工程で施されたものであった。また、氏は値段に捉われず、自分の感性やときめきにしがたって商品を手に取り、購入は考えないで美の探求のために試着してほしいという想いから、商品に値札はつけていない。2021 年に南青山から東京新橋へ店舗を移転し、その内装は、美しさを体感し、社会問題を楽しく学べる場として設計・デザインがされている。氏はこの他にも、性被害防止、性教育、女性の自立、命の大切さをテーマに、携帯電話や女子中学・高等学校の制服、性教育絵本『ドクターピーチセックス エデュケーション』（SAVANT、2013 年）を作成した。

また、パートナーの千々松由貴氏と 2020 年に設立した「MOMOKO CHIJIMATSU」は、美を追求し芸術を通じて社会問題の発信を行なうコンセプトチュアルなアートブランドである。同ブランドの製品は、多くの著名人がマスメディア等で着用し、話題となる。さらに、2021 年に始動した「りぼんプロジェクト」は、様々な社会問題を企業や世界中の人々がりぼんのようにつながり、ともに解決していくことを目的としており、このプロジェクトから命の大切さと性教育を学ぶトレイラー「りぼん号」が 2021 年にトヨタ自動車において製造された。「りぼん号」は、廃業した材木屋の在庫と廃材で作成され、茶室の入口を模した入口は平等を表わし、車内の内装は地球の誕生がイメージされている。

氏は「本当に大切なものを心に留めてもらうためには、視覚的に美しいものと、内容をしっかりとリンクさせることがとても効果的です」と強調した。

人間の使命 —美しい未来をデザインする—

氏は、戦争・環境破壊・差別等を長期にわたって行う人間は、地球にとって優しく・美しい存在ではないと断言する。地球上では様々な才能あふれる生き物が存在しており、そのなかで、地球上で脳が一番発達している生き物である人間は、その脳を活用して戦争をなくし、すべての生き物が棲みやすい自然溢れる地球を取り戻し、平等な社会を創造する必要性があると述べた。

この観点から、氏は自身の会社始動時に、経営と経済の本質について考えた。これまで、氏は資本主義経済と社会主義経済のどちらにも違和感を抱いていたが、しかし、「経済」という言葉は世を治め民の苦しみを救うという意味の「経世済民」の略語であると知り、「経世済民」は氏の主軸のひとつとなった。さらに「経営」とは、本来は仏教用語であり、自分の人生をどう営み、自分自身をどう活かすか、という意味だと知ったという。氏にとっての経営とは「自分が生きる幸せを感じながら、社会に貢献し、いまある当たり前の社会を当たり前だと思わないで、世界にとって、地球にとって、幸せが永続的に循環できる方法を考え行動していくこと」だと考え、美しい未来をデザインすることは人間の使命であると述べた。

おわりに

講演の最後に、氏は会場へ向けつぎのような力強いメッセージを送った。

「生きていく上で、楽しいこと嬉しいことを感じた時は命に感謝し、悲しいことつらいことを感じた時は自分という存在はずっとずっとずっとつながる奇跡の存在だということを思い出してください。そして困っている人・助けが必要な人がいたら勇気をだして行動してみてください。奇跡の存在であるあなたにはそれができる力があることをどうぞ忘れないでください」。



幾田桃子氏



同上

《質疑応答概要》

氏は、小学生から社会の不条理を考えるようになったきっかけは？という質問に対し、日常における疑問や不条理を「どうして？」と突き詰め、他者の「悲しい気持ち」に共感することが不条理を考えることにつながったと答えた。別の質問では、現在の日本における不登校者数や自殺者数の増加の原因について、氏に意見が求められた。質問者は、学生の居場所が家か学校に二極化していることが原因、と自身の見解を述べた。氏は、心の中に温かいものを感じなくなり、社会でのつらい体験がもとになって、社会との関わりを避けることにつながる。しかし現在の社会

は真に美しいものではないため、我々が社会を変えることが大事であると述べた。居場所の二極化についても、心が取り戻せる第三の居場所の必要性も語った。つぎの質問者は、「持続可能な社会（SDGs）」を実現するための、個人での実践方法がわからないと述べる。氏は、今日この場で挙手をして発言することは勇気があることで、質問者はすでに自分で行動する力を持っていると背中を押した。つづけて「持続可能な社会（SDGs）」は堅苦しいものではなく、社会の疑問を考え、自身で意識することである。質問者のように手を挙げて質問することも、その質問を聴いた他者の意識へつながるひとつの SDGs であると回答した。



質疑応答の様子（中央左：幾田桃子氏）



質疑応答の様子（幾田桃子氏）

《対談の概要》

つづいて幾田氏と仏教 SDGs を推進する本学学長・入澤崇氏の対談が行われた。幾田氏は、職業の枠に捉われず、様々な分野の人々とつながることで、今までにない、より良い社会をつくっていけると述べた。入澤氏は、「人間」や「仲間」、「世間」という言葉には「間（あいだ）」という字が含まれるように、日本文化は関係性を重んじている。しかし、現在の社会問題は関係性を断ち切ることによって生じており、幾田氏のように衣食住などの身近なものから社会を見つめ、新たな関係性を構築する活動を本学でも発信したいと語った。また、入澤氏は SDGs の「誰ひとり取り残さない」という理念は、既に仏教のなかにある発想であり、西洋中心の価値観が通用しなくなり、これまで見落とされてきた価値観にもう一度立ち返るものであると気付いた。その時に、仏教の思想と SDGs の理念は接続可能であることを確信したと述べた。幾田氏は自身が 20 年以上前から、いまでいう SDGs の活動を行っていたのは、父は仏教徒、母はキリスト教徒であり、ふたつの思想の良いところを取り入れて育ったことに起因していると述べた。また、アメリカ留学中から人々の幸せや平等という観点から資本主義経済に限界を感じており、今後は西洋の良い部分を取り入れながらも、東洋の思想が大切になると主張した。入澤氏は、仏教は人としての幸せや、平等の実現などのヒントが詰まっている。本学の新入生には、まず「仏教」という先入観を払拭してほしいと、必修科目に「仏教の思想」を設けていると語った。幾田氏は、何かを見た時に、感じ・考えることは、心が豊かでないとできないと述べ、これに対して入澤氏は、世界で最初に心の解明を始めたのは仏教であり、心を空（から）にしておくことで柔軟に物事を受け止められると述べた。幾田氏は、自身も常に先入観を持たず、心に余裕をもつことで、とてもワクワクするプロジェクトが生まれると語る。

最後に、入澤氏は、SDGs は多くの企業や行政も推進しているが、各々が意識と行動を変え、拝金主義から脱しない限り、SDGs は劣化していくと警鐘を鳴らした。幾田氏は、お金はあくまでツールであると述べ、「持続的な幸せの循環がつながっていくような、そんな社会になっていくと、とても素晴らしいと思っています」と想いを述べた。



左：入澤崇氏、右：幾田桃子氏



入澤崇氏



幾田桃子氏

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)